

大学生は「生徒」なのか

——大衆教育社会における高等教育の対象——

伊 藤 茂 樹

1. 「生徒」としての大学生

多くの大学生が自分たちのことを「生徒」と呼ぶようになったのはいつ頃からであろうか。

筆者が大学に入学した1983年には教員と同様「学生」と呼ぶのがふつうだったと記憶しているが、個人的な限られた経験・見聞であるし、もとよりデータがあるわけでもないので正確ではない。ともあれ現在、教員は「学生」と呼び、多くの学生は「生徒」と呼ぶという不一致は、大学生という存在に対する両者の意味づけの食い違いとともに、大学生についての「理念」と「実態」の乖離を象徴しているように思える¹⁾。

今日大学生は、教員や制度の側が「学生」と位置づけるにもかかわらず、実態としても彼らの感覚としても中・高校生と変わらない「生徒」になっているのではないか。学力の低下が目立ち、同時に授業の出席率は奇妙に高い今日の大学生を、もうとっくに「生徒」と見なして遇している大学や教員も少なくないのかもしれない。

本稿では、大学生に関するこうした現象を「生徒化」ととらえ、大衆教育社会が到来した90年代において大学生が置かれている社会的状況について、彼らを対象とした質問紙調査のデータに基づいて考察を加える。

そこで前提となる関心は以下の通りである。

まず、高等教育への進学率は微増を続けているが、これによって高等教育の大衆化はさらに進んでいる。このことは必然的に、大学という教育機関やそこに在籍する大学生が社会的に占める位置が変わりつつあることを意味する。

しかし、このことを前提として大学生の側に着目した研究が十分になされているとは言い難い²⁾³⁾。80年代の「大学レジャーランド論」においては、学业を放ったらかしてサークル活動と友人や異性との交遊に明け暮れる大学生がひたすら嘆かれた⁴⁾。そして今日では、主体性も学ぶ意欲もなく、講義では私語、ゼミでは「死語」(=沈黙)ばかりの大学生が嘆かれたり⁵⁾、逆にボランティア活動への関心や参加に「今どきの大学生も捨てたものではない」と希望が見出されたりする。これらは、大学教員をはじめとする「大人」の側からの、昔と比べて「子どもになった」大学生への慨嘆が主であるが、なぜ大学生が「子ども」になったのかについて、説得的な議論はなかなか見当たらない。嘆いてばかりいても始まらないのである。

大学生がこのように（主に「望ましくない」姿へと）変貌する一方で、90年代は大学改革の必要性がかつてなかったほど叫ばれ、実行に移されている時代である。世界的に賞賛されている日本の初等教育に比べて、高等教育はその質が低いことが定説となって久しいが、こうした現状が批判され、「とにかく改革しなくては」と大学は右往左往するようになった。一連の改革においては、これまで学者として、最高学府としての権威にあぐらをかいてきた教員と大学は、アカウンタブルなサービスを提供すべき者と位置づけ直される。ここでは当然、学生はそのサービスを自ら吟味して選択し、消費する「消費者」と位置づけられることになる。

しかしこうした位置づけは当の学生の方からの主張・要求によって導かれたものではない。むしろ一連の改革論議と実行においては、学生の声や立場は置き去りにされている⁶⁾。だからといって現在の改革が学生のニーズに合っていないとは限らないが、少なくともそのプロセスにおいては学生不在の

まま、或いは学生の実像をきちんと視野に入れることのないまま、「学生のため」を、唯一ではないにせよ重要な根拠にして改革が実行されているのである。

こうした改革は、学生にとってはピントのはずれたものとなる可能性が小さくない⁷⁾。詳細なシラバスを作ったはいいが、学生はそんな分厚くて訳の分からぬことが細々と書かれているだけの冊子など手にもとらず、友人がとる授業を選択するだけかもしれないるのである。

学生が変わったという事実があり、かつ大学も変わろうとするのであれば、大学の変化は学生の変化に対応したものでなければならないはずである。「変化した学生に合わせる」のか、「変化した学生を昔の姿に戻す」ことをめざすのかは選択の余地があるが、現在の学生の姿を、慨嘆や不満や願望ではなく客観的にとらえたうえで改革の方向を検討すべきである。本稿ではこの改革の方向を指示すことまでは意図しないが、改革論議に欠けている一部分を補うには資するところがあると考える。

2. 大学生の日常と将来展望——「生活の場」としての大学

こうした状況下で大学生が送っている生活と意識、将来展望について、まず全体的にデータを見てみよう⁸⁾。

大学生の日常生活は「生徒役割」を形式的、受動的に遂行することで流れしていく。大学や授業へのコミットメントは、深くはないが、量的には大きい。平均して週に4.9日、つまり平日はほぼ毎日大学に行き、授業には総じてよく出席する。大学への満足の度合いは高くもなく、大学教育を何のために受けているのか、何の役に立つかについて、明確には見えていないが、期待は大きい。また中・高校生と同様、友人関係は主に学内で展開し、これは大学生活の主要な部分を占めることになる。総じて大学は、特定の目的や機能のために利用したり、そのための足がかりを見つける場というよりも、全般的な「生活の場」となっている。

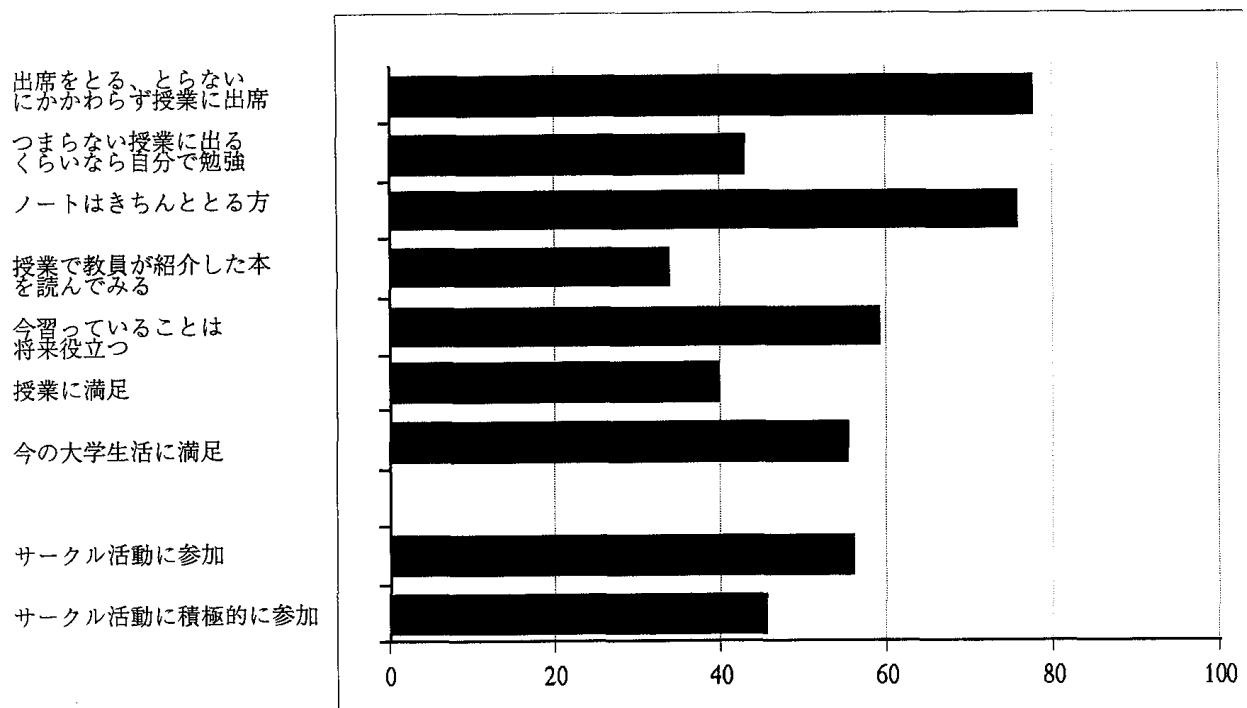


図1 日常生活

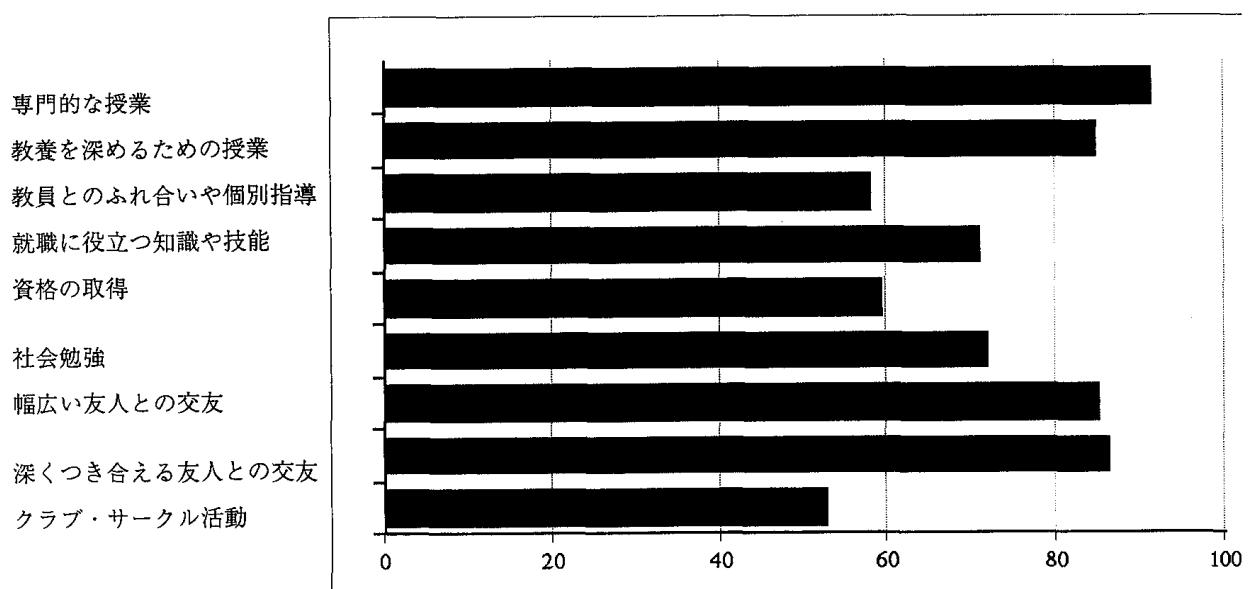


図2 大学への期待

また、かつて正統的な文化に対抗する独自の若者文化を形成し、それを担っていた大学生の役割も後退しつつある⁹⁾。例えばかつてサークル活動は、大衆化した「レジャーランド」大学において、学業に興味を持てない／持たない学生が、活動を通じて大学生活に意味を見出す拠り所として、また社会に向かって若者文化を発信する拠点として積極的な意味を持ち得ていた。しかし今日サークル活動は退潮し、参加者の比率が減少するのみならず、参加する学生にとっても、活動そのものに意義を見出すというよりは、クラスや学科と同様、居場所となる親しい友人の小グループを形成するためのひとつの場でしかない¹⁰⁾。

このような生活を送る大学生にとって、将来とはまだかなり漠然としたものである。将来の「夢」という、近年非常に好まれて用いられる言葉には反応するが、この言葉はそれじたい漠然とした願望を指すものである。そのため、「職業ややりたいこと」が決まっている者はこれより少なく、しかもこの割合は学年とほぼ無関係である(1年から順に57.7%, 48.3%, 52.5%, 56.4%)。そして、具体的に準備をしている者はさらに少ない。将来や職業生活はかなりの程度やり直しのきく、可変的なものであるというイメージ(「転職するのもよい」)は、漠然とした「夢」を夢想したり語り合ったりしながら「なんとなく過ぎていく毎日」を可能にする。従って、そのような彼らは自分を「大人」とはみなさない。「大人」と思う者の割合は3年生で増えるが(1年から順に29.6%, 28.0%, 39.1%, 43.6%), これは20歳で法律上「成人」を迎えたことで「大人」と見なす者がある程度いることによると思われる。自らを「大人」と見なす少数派も、その根拠は内面に確立したアイデンティティなどではなく、単に法律上の線引きなのである。

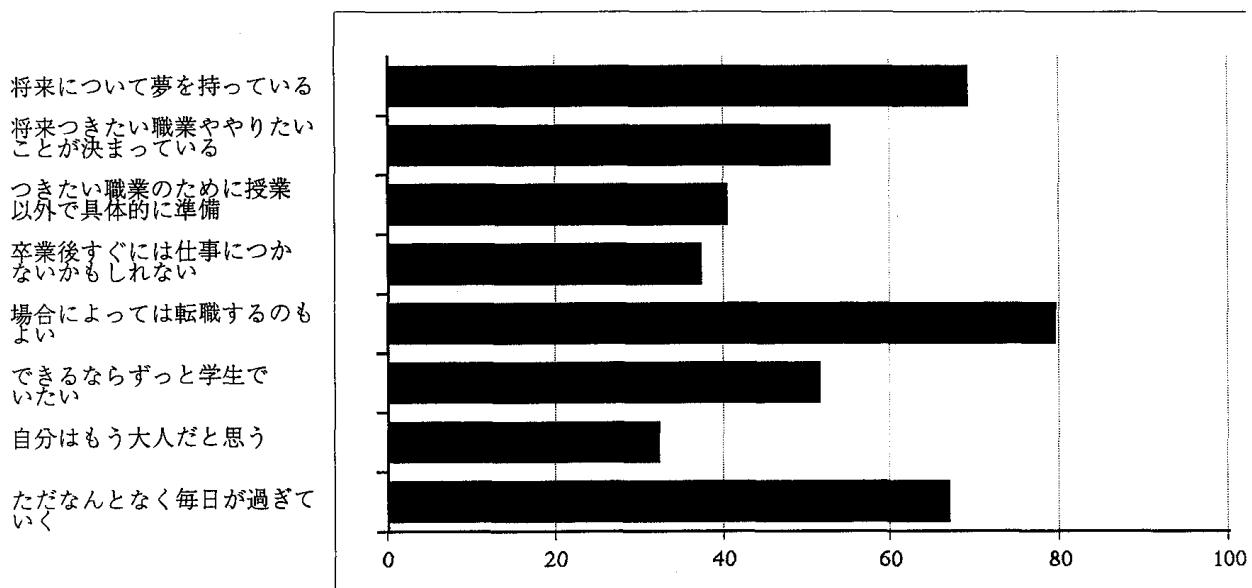


図3 将来展望

3. 「生徒化」という概念

(1) 「生徒化」とは

大学生が高等教育を受ける機会に恵まれた一部の特権層であり、そのことにアイデンティティを見出して生活し、それに基づいた将来展望を抱いていたような時代が過ぎたことは言うまでもない。今日大衆化した大学において大学生は、専ら教育を受ける存在として「生徒化」し、中学生、高校生と質的に大きく変わらない存在となっているように思われる。

さてこの「生徒化」という概念は、あまり一般的ではないものの、何人の論者が多かれ少なかれイリッチの「学校化」概念に触発されて、それぞれの文脈で用いてきた。

岩見らは「生徒化」を、「『生徒』役割への同一化を促す人為的過程。均質的な存在への画一化」(岩見, 1986), 「特定年齢層の子どもたちを『一人前の生徒』にしようとする、社会の発達期待プログラムに即応した学校過程」(岩見・富田, 1982。ここで「一人前」とは、〈わたしは学ばなければならない存在である〉ことを充分内面化し、未熟-成熟スケールの一定の段階に相応し

た態度と行動をとれることを意味する…引用者注) などと、いわば他動詞的に子どもや若者を「生徒化」する学校の側に着目して用いる。

一方、生徒の側について自動詞的に用いる論者もいる。佐々木(1983)は「序列・評価・資格などにこだわり、生徒自らがそれを求めようとする態度」として、学校が教育の「結果」として付与する形式的な証明に表面的には反発しながらも結局のところ依存する態度・心性を「生徒化」と呼ぶ。また関(1985)は「〈教師であること〉を演ずる教師の模範演技にならって、〈自らに敵対して教師として振舞うこと〉を学習し身につけること」と比喩的に記述する。ここで教師とはセルフ・コントロールに成功した模範的な「真の」生徒の行く末であり、「生徒化」は「教師化」「主体化」とイコールである。

これらの概念規定が含意するところは、以下の3点に要約できよう。

- ①学校教育はその言明とは裏腹に内実のない儀礼であるが、制度としてその対象たる子ども・若者を巻き込む力を持っており、彼らに教育の対象としての役割(=生徒役割)を遂行させている。
- ②生徒役割の遂行は子ども・若者の内発的な動機や実存とは無関係である。
- ③制度・儀礼としての教育はその成果(=段階的に未熟から成熟へと進んでいく)を証明するために評価、進級、学歴、資格などの装置を持ち、他律的に教育に依存する「生徒」は進んでこれを求める事になる。またこれらは「生徒」に対して強力な統制手段となる。

本稿では制度としての教育についてのこうしたとらえ方を共有しながら、学校教育がその対象である若者をどのようなものとして現象させているかを記述・分析する概念として「生徒化」を用いる。しかし、上述の論者たちは「生徒化」概念を(明示するにせよしないにせよ)、そもそも制度的に生徒とされている小・中・高校生を念頭に置いて、よりいっそう、ないしはより望ましい「生徒にする/なる」という意味で用いている。それに対して本稿ではそもそも「学生」であり、生徒ではないとされている大学生について、彼らが「生徒と化す」現象について用いる点で異なる¹¹⁾。

(2) 「生徒化」の構成要件

「生徒化」を以上のように枠づけると、その構成要件として次のようなことが考えられる。

- ・「未熟性」

自分は成熟へ向かう段階の途上にある未熟者であり、学ぶべきことがまだ多く残っていると認識する。

- ・「他律性」「依存性」

学ぶべきことは学校が用意し、教えてくれる（＝自分で見つけ、身につけるのではない）と認識する。

- ・「一面性」

自分を専ら上記のような存在（＝「生徒」）として位置づけ、行動するため、他の側面が希薄である。

そしてこれらの要件は、現代の大学生においては以下のような現象形態をとると考えられる。

①大学や学部、学科、或いはそこで形成される友人集団への所属がアイデンティティとなり、自律・成熟した一人の個人としての自己イメージが希薄である。

②長期的な展望を持てず、資格などの形で可視化・数値化される段階的な「仮目的」¹²⁾の連続的達成が目的となる。「教育とは仮目的を提供する営みである」¹³⁾とすれば、大学生はこのような意味での教育の対象＝生徒となっている。当然、現在の高等教育は完成教育ではない。

③大学が与える教育サービスに対して受動的に充足し、他のものを積極的・具体的には求めない。

④生活の大部分が大学内（大学での人間関係なども含む）において展開する。

しかし「生徒化」した大学生は、これらのことに対する満足しているとは限らない。「生徒」である自分やその日常に漠然と満たされないものを感じながら、

しかしそれを自ら打開する術を持たない、或いは打開しようとしている者は、いわば二重に「生徒化」されていることになろう。この点に着目すれば、「生徒化」した大学生には、不満を感じずに生徒として完結しているタイプと、不本意ながら生徒にとどまっているタイプの2つを考えることができよう。もちろんこれら以外に、生徒化していない大学生も存在し、それもまた、生徒としてではない他の自分を確立しているタイプと、生徒でもないし他の自分も持たないタイプに分けることができよう。

ただし今回の分析では、このレベルの検討に先立ってまず生徒化の有無ないしは強弱に焦点を当てる。

(3) 「生徒化」の尺度化

次に、上記の「生徒化」概念と構成要件を考慮して大学生の生徒化の度合いの尺度化を試みる。ここで尺度化に用いるのは以下の12の質問項目である。

生徒化にプラスの項目

- ・教員が出席をとる、とらないにかかわらず授業に出席する
- ・知り合いがいるという理由で、興味のない授業でもとることがある
- ・資格の取得を大学に期待している
- ・就職に役立つ知識や技能を大学に期待している
- ・(ふだん親しくつきあっている)友達とつきあわないと、自分の居場所がなくなってしまう
- ・ただなんとなく毎日が過ぎていくように感じる

生徒化にマイナスの項目

- ・つまらない授業に出るくらいなら自分で勉強する
- ・授業で教員が紹介した本を読んでみることがある
- ・将来つきたい職業のために授業以外で何か具体的に準備をしている
- ・ふだん親しくつきあっている友達に違う大学の人がいる

- ・自分はもう大人だと思う
- ・政治や社会の出来事に关心がある方だ

上記の計12項目について、「プラス」の6項目はYESの場合に+1点、NOの場合に-1点を加算、「マイナス」の6項目はYESの場合に-1点、NOの場合に+1点をそれぞれ加算し、各回答者の得点を計算し、「生徒化指数」とする。その結果、-12点から-2点までの者を低位群¹⁴⁾、0点から4点までの者を中位群、6点から12点までの者を高位群と分類する。なお、各群の分布は低位群：194名、中位群：413名、高位群：201名である。

まず、属性別に平均得点の差異をみてみる。

男女別では女子の方が平均得点が高い。

大学別では、平均得点が目立って高いのがD大学であり、これは教員養成を主とする地方大学である。次に高いE大学は大都市の私立女子大である。逆に低いのはG大学、B大学で、いずれも大都市にあるキリスト教系の私立大学である。

出身地（高校時代まで住んでいたところ）との関連をみると、平均得点は人口規模と逆の相関を示し、政令指定都市出身者が最も低く、町村出身者が最も高い。また出身高校や受験の経験については、進学率の低い高校出身者よりも中程度の高校出身者、一般入試での入学者より推薦入試での入学者、浪人経験者より現役での入学者がそれぞれ平均得点が高い。

このように、生徒化の度合いは属性と明確な関連を示しており、その関連は我々の経験や実感に照らして非常に納得のいくものである。つまり生徒化を促すのは、都市よりも地方の教育環境や文化、学校格差体制において上位や下位の高校よりも進学校化を図っているような中堅校、一発勝負や浪人をして大学に行こうとするよりも推薦や現役で入学しようとする／できるような受験行動や態度、教員をめざすような学生／教員を養成する大学¹⁵⁾、さらに女子の学生文化の一部である。

表1 生徒化指数の属性別平均

	平均	標準偏差	人数
全体	1.97	4.22	808
〈大学〉			
A大学	1.80	4.22	79
B大学	1.32	4.24	129
C大学	1.45	4.76	77
D大学	3.92	3.58	75
E大学	2.58	4.19	148
F大学	2.34	3.98	124
G大学	1.15	4.08	176
〈性別〉			
男	1.63	4.22	340
女	2.22	4.22	466
〈出身地〉			
政令指定都市	1.55	4.31	205
30万人以上の市	1.80	3.96	158
10万人～30万人の市	1.79	4.52	212
10万人未満の市	2.24	4.04	100
町村	2.83	4.15	116
〈出身高校の進学率〉			
～40%	1.45	3.84	62
40～60%	2.39	4.11	62
60～80%	2.37	4.98	93
80%～	1.92	4.14	585
〈入試のタイプ〉			
一般	1.74	4.26	619
系列校からの推薦	2.82	4.06	88
系列校以外からの推薦	3.12	3.71	91
〈現浪〉			
現役	2.26	4.12	576
浪人	1.13	4.27	200

4. 「生徒化」と日常生活、意識

次に、生徒化の度合いと他の変数との関連について検討する。具体的には、生徒化指数を独立変数とし、高位、中位、低位の学生がそれぞれどのような生活を送り、どのような意識を持っているかみていく。なお、表にあげた数値はすべてカイ自乗検定の結果5%水準で有意である。

①大学生活の日常と意識

授業などの大学の教育や大学生活に対して、生徒化の度合いの低い者は期待水準は高くないが満足・充実や主体性の度合いは高く、生徒化の度合いの高い者は逆に期待水準は高いが満足度・充実度は高くない。

登校日数をみると、生徒化低位群はやや少ない。これに対して高位群は日数は目立って多くはないものの、サークルやアルバイトを理由に授業を欠席することは少なく、授業に出席することへの執着がみられる。しかし彼らは授業への満足度は低く、不満を感じながらも他に有效地に時間を使う術を知らず(或いは出席をとる授業に縛られ)、習慣として惰性的に出席を続ける様子がうかがえる。

ただしサークル活動に関しては期待と実際の活動とともに、中位の者が高い。ここから、サークル活動には生徒化を強める側面と弱める側面の双方があると考えられる。例えば、サークルで中心的・指導的役割を果たしている者は生徒化の度合いが低い者に多く、こうした積極的な関与は生徒化を弱める方向に働いていることがわかる。

生徒化とは、生徒としての自分や生活に満足・充足していることを必ずしも意味しない。生徒としてしか生きていらない自分自身に対して漠然とした不満や欠如を感じながら、こうした状況を自ら積極的に打開することができない者が生徒化した大学生である。大学生の場合は特に、単なる生徒であってはならないというメッセージも大学の内外で繰り返し聞かされているため、生徒化した大学生はその状態に充足することもできない。

そうしたなかでサークル活動は、積極的に関与して単なる生徒ではない大学生へと「脱皮」する契機ともなり得る一方、大学の中で惰性的に生活する居場所を得るだけで、より「生徒」へと固定化する場合もあり、両義的であると言えよう。

表2 生徒化と日常生活、意識（単位：%）

	低位群	中位群	高位群
大学に社会勉強期待	61.9 < 74.1	75.6	
大学に深くつき合える友人期待	80.9 < 88.1	89.6	
授業に満足	50.0 > 35.1	37.3	
大学生活に満足	60.3 > 55.9 > 49.3		
今習っていること将来役立つ	66.8 > 57.6 > 52.7		
今通っている大学に誇り	52.1 56.2 > 45.8		
サークル、バイトなどある時に授業休む	50.3 49.4 > 33.3		
登校日数(週平均：この項のみ日)	4.71 < 4.95	4.88	
大学にクラブ・サークル期待	44.0 < 60.0 > 48.8		
サークルに入っている	45.9 < 63.2 > 53.7		
サークルで役職についている（該当者中）	44.9 > 36.4 > 29.0		
学外でボランティアしている	17.0 > 8.5	7.0	

②高校時代

大学生としての生徒化の度合いは、これまで送ってきた学校生活とどのように関わっているのであろうか。高校時代の様子と生徒化との関連をみる。

生徒化の度合いの高い学生は、高校時代にも受動性や活動範囲の狭さ、そして学校の規範や求めるものへの従順さなどの傾向を示しており、「おとなしい良い子」であったことがわかる。こうした生徒がそのまま大学に入学し、同じような生活を送っているのが生徒化した大学生である。しかし、このよ

うな傾向は教師からの評価につながるとはあまり意識されていない。実際の教師からの評価がどうであるかは別であり、教師は生徒化をどうみるのかという問題については別に検討が必要であるが、生徒化した生徒・学生は、そうした自分のあり方に対して、高い評価が得られるとは必ずしも思っていない

表3 生徒化と高校時代（単位：%）

	低位群	中位群	高位群
高校時代先生に気に入られていた	69.9	69.3	> 56.2
高校時代学校と家との往復だった	57.5	< 71.3	< 82.6
高校時代学校に友達多かった	80.2	> 76.2	> 65.7
高校時代アルバイトしていた	38.5	> 32.0	> 24.9

いという意味で、自信が持てない存在である（④参照）。

③将来展望

現在の生徒化の度合いは学生の将来展望とはどのように結びつくのであるか。

生徒化は将来についてのポジティブな見通しにはつながらない。逆に生徒化していない学生は職業に対するアンビションが強く、「ずっと学生でいたい」といったモラトリアム意識は弱いが、生徒化した学生に比べて、将来を固定的なものと考えていない（「卒業後すぐに仕事につかないかも」「場合によっては転職もよい」）点が目を引く。

つまり、生徒化していない学生は、目的が明確で将来について主体的に考えるがゆえに、必ずしも卒業後すぐに職業につくとは限らないし、転職の可能性も否定しない。一方生徒化した学生にとって将来とは、何をするかはさほど明確／重要ではない。「卒業すれば就職するもの」とか「結婚／出産を機に仕事はやめるもの」といった形でいわば既定のレールとして意識されており、自分のやりたいことや目標のために道を切り開いていくという意識は弱い。

表4 生徒化と将来展望（単位：%）

	低位群	中位群	高位群
収入、安定より自分らしさ生かせる仕事	85.0	81.8	> 76.6
将来に夢持っている	85.5	> 69.4	> 52.7
卒業後すぐに仕事につかないかも	51.3	> 35.2	> 26.4
場合によっては転職もよい	86.0	> 78.9	76.1
結婚、出産機に仕事やめる	14.1	< 23.7	23.1
つきたい仕事ややりたいこと決まっている	69.4	> 51.5	> 37.8
できればずっと学生でいたい	42.5	< 53.5	58.2

④自己イメージ

生徒化した学生は全体に肯定的な自己イメージを持つことができない。他者志向的で自信が持てず、個性や自分らしさへの志向性は弱い。生徒化していない学生はこれらにおいて逆の傾向を示しており、生徒化は自己の肯定や内部志向性と相反する傾向性であることがわかる。

ここにあるのは、学校が与える「仮目標」に依存し、他者の目を気にして他者と異なっていることを恐れ、自分に自信が持てない未熟な自己である。

表5 生徒化と自己イメージ（単位：%）

	低位群	中位群	高位群
自分がどういう人間かよくわからない	41.2	< 59.3	< 69.2
他の人と違っていていい	58.2	> 48.5	> 39.3
特定のものやことに強いこだわり	80.4	> 65.4	> 54.2
自分には良いところがある	91.8	> 83.5	> 73.6
やる気になればたいていのことできる	78.9	78.9	> 65.7
自分がいやになることがある	59.8	< 73.4	< 79.0
自分が傷つくのがこわい	57.7	< 71.4	< 83.6
自分の言動を後悔することよくある	68.6	< 80.6	< 84.1
他人が自分をどう見ているか気になる	66.5	< 75.5	< 88.6
お年寄りや困っている人を助ける	54.4	> 43.1	> 34.3

⑤友人関係

生徒化した学生の友人関係は、範囲が狭く固定的で、同質性が高い。またつき合いは表層的である。しかし同時に友人に対して依存的であり、「自己イメージ」の項でもみたように、自己を主張するより相手に「合わせる」傾向が顕著である。このような友人関係は、クラスや学科を単位とする「グループ」にとにかく所属していないと大学における「居場所」がなくなるという消極的な意味で形成されたものという色合いが強い¹⁶⁾。

ただし友人関係についての項目には、生徒化中程度の者に目立つ傾向もいくつかみられる。長電話、ポケベルでのやりとり、悩みごとなどの相談といったコミュニケーションは生徒化が中程度の者に多く、このように親密性や自己開示を志向したコミュニケーションは、生徒化した者、していない者とともに少ない。

これについての解釈として考えられるのは、生徒化していない者はこうした関係をあまり必要とせず（「一人で過ごす方が気が楽」は生徒化低位群に多い）、逆に生徒化した者はこうしたコミュニケーションを望みながらもかなえられない（「友達には何でも話すものだ」「親友と呼べる友達がほしい」は生徒化高位群に多い）、或いはこうしたコミュニケーションにすがらないと自己の居場所が確認できないということである。

また「親しい友達に同じサークルの人がいる」も生徒化中位群で多いのは、先にみたようにサークル活動へのコミットが両義的である傾向をここでも示している。

⑥生徒化と学校教育のパラドックス

上記の分析で見えてきた生徒化した学生の姿は、学校教育が表向き称揚するものとは異なる。学校が特に近年「あるべき生徒／学生像」として繰り返し唱えるのは、外部志向で受動的に役割を果たすのではなく、自分に自信を持って道を選び、主体的、積極的に人生を切り開いていく、他の誰でもない「個性的」な人間であれというメッセージである。

表6 生徒化と友人グループ（単位：%）

	低位群	中位群	高位群
<ふだん親しくつきあっている友人>			
つきあっているメンバーが固定	82.0	86.0 < 92.5	
いつもリーダーが決まっている	41.8	39.0 < 47.8	
一緒にお茶を飲む	84.5	81.8 > 75.1	
互いの家に泊まりにいく	53.6	54.7 > 46.3	
一緒に旅行に行く	61.3 > 55.0 > 48.3		
長電話をする	59.8 < 64.6 > 55.2		
ポケベルでやりとりする	30.4 < 44.2 > 38.8		
悩み事を相談する	72.7 < 77.7 > 67.7		
他人のうわさ話をする	63.4 < 72.6 < 78.1		
同じサークルの人がいる	41.6 < 57.7 > 43.0		
同大学でクラス、サークル違う人がいる	31.6	31.0 > 23.0	
中・高の同級生がいる	82.9 > 70.2	68.2	
異性がいる	65.1 > 55.7 > 31.5		

表7 生徒化と友人関係一般（単位：%）

	低位群	中位群	高位群
相談にのってほしい	85.6 < 91.0	91.5	
頼りにされている	71.0 > 62.4	59.2	
相手に合わせて振る舞う	26.4 < 31.1 < 37.3		
もっと自分のことわかってほしい	31.4 < 42.9	39.5	
趣味や好みが違う人とは友達になれない	20.6	24.5 < 35.8	
いつも楽しくつきあっていたい	85.6 < 92.0	96.0	
ノリの合わない人とは友達になれない	48.5 < 55.0 < 59.2		
友達には何でも話すものだ	33.5 < 42.5 < 49.3		
親友と呼べる友達ほしい	71.0 < 83.5 < 91.5		
大勢の人とうまくやっていける	57.2	56.9 > 43.8	
友達が多い方だ	44.6	43.8 > 23.9	
自分の意見言うより友達に合わせる	34.5 < 57.1 < 69.2		
自分の好みをはっきり主張する	76.8 > 66.3 > 54.7		
人に相談すること多い	39.2 < 48.7 > 41.8		
一人で過ごす方が気が楽	66.0 > 55.7	58.7	
彼氏あるいは彼女がいる	41.2	39.0 > 25.4	

しかし、このいわば「表のメッセージ」とは裏腹に、学校は生徒を生徒のままでどめておく「裏のメッセージ」をも発している。おとなしく従順で与えられた枠の中にとどまり、自己主張しないことが、生徒にとって学校という社会でサバイバルするためには好都合なのである。これは例えば、授業において学生にしきりと発言を促しながら、いざ発言が出るとそれを即座に否定して学生の無知を非難、慨嘆し、二度と発言などするものかと学生を懲りさせてしまう教師の言動に典型的に表れている。学生にとってこうした経験は、さらに発言を抑制することにつながり、その結果いつまで経っても自信を持って発言できるようにならないという悪循環を招く。生徒化した学生が受けてきた10数年間の学校教育は、こうした悪循環の連続、蓄積だったと言ってよからう。

また、このように身につけられた処世術は、学校や教師側からのはたらきかけに対してのみならず、生徒たちが形成する集団や人間関係においても重要である（例えば、いじめのターゲットにならないためには、他人と違わないように、目立ったり浮いたりしないようにするのが最も得策である）。従って、生徒化を脱した生徒、学生は、この無難なサバイバル戦術をとらなかつた、ないしは放棄した者たちであるとも言えよう（当然、それに伴う傷を負っている可能性も高い）。

ここにあるのは、学校教育が逃れることのできないパラドックスである。すなわち、学校教育は自律や主体性を促すが、教育によって自律を「導く」ということにそもそも矛盾がある。自律を望んで熱心に教育すればするほど彼らの自律は困難となる。一方、仮に生徒たちが本当に自律し、主体的かつ批判的に考え行動し始めれば（このことじたいは教育以外の契機によっていくらでも可能である），学校は教育をする対象と根拠を失ってしまう。学校はいつまでも教育の必要な、未熟で依存的な「生徒」を必要とする制度であり、実際にそうした生徒を作り出すのである。

5. 「生徒化」の社会的背景

以上の分析で、当初生徒化の構成要件としてあげた「未熟性」、「他律性」「依存性」、「一面性」という特質を、生徒化した大学生は概ね示していることが確認できた。このような大学生のあり方は、我々が青年期ないしは青年期後期、或いはもはや子どもではない大人としてイメージしてきた大学生の「あるべき姿」とはかなり隔たっており、幼く頼りない、おとなしい中学生か高校生に近いものである。

そこで次に、大学生をこのように生徒化させる社会的な要因について考察する。これは、高等教育がユニバーサル化した1970年代以降一貫している状況と、90年代以降に生じてきた状況に分けて考えることができる。

(1) 高等教育のユニバーサル化、サービス化

大学生の「生徒化」はまず、進学率が上昇し、専修学校も含めると同年齢の過半数の者が高等教育に進学するという状況下で、大学で教育を受けるということが、社会的な位置関係においてそれじたいでは何も意味しなくなっていることの必然的結果としてある。かつて大学生は大学生でない者、大学に進学できなかった者との位置関係において自らを意識せざるを得ず、エリート予備軍（トロウ¹⁷⁾のいうエリート段階）、対抗文化の担い手ないしは異議申し立て者（マス段階）など、その社会的位置に対応した役割を集團として果たしてきた。しかし今日大学生であることは、年齢が20歳前後であるという発達段階上の意味しか持ち得ない。従って、かつて「学生」に期待されたような自律性や主体性を持ち得ない者が多く含まれることは必然であろうし、その意識やかまえにおいて、短大など他の教育機関に学ぶ者との差異も縮小していると考えられる。

むしろ、大学に行かないわけにはいかない（＝大学を出ていないことがステイグマになる）という消極的理由で進学するのが主流となっており、こうした状況は、大学に先立ってユニバーサル段階に入り「不本意入学」が問題

化した高校のそれに類似してきており、「問題解決の先送り」¹⁸⁾が高等教育段階にまで及んでいると言えよう。

苅谷（1997）が指摘するように、「学歴社会」「受験戦争」という定型的なイメージとは裏腹に、若年人口の減少に伴い近年の大学には、推薦入試や受験科目の減少の恩恵を受け、さしたる苦労もなく入学してきた学生が目立って増えている。こうした学生は高校と大学の間にべつだん不連続を感じることなく、大学でもそれまでと同じように「生徒」として振る舞うことになる。これは、かつての大学生が、高校まで「生徒」でありつづけながらも、真剣な進路選択や厳しい受験という試練を経て大学に入学し、高校までの「学校」とは異なる大学の雰囲気にカルチャーショックを受けながら何とかそれに適応して「学生」になろうとするのが一般的だったのとは大きく異なる状況である。

またこうした状況を背景に、高等教育を行う側も彼らを一人前でない「生徒」として扱うようになっている。入学時の懇切丁寧なガイダンスやオリエンテーションから始まり、クラス担任による公私にわたる指導、研修旅行、カウンセリング、各種資格の取得のための指導、就職指導など、学生の現在と未来にわたる生活の様々な側面に關してきめ細かくケアすることがより良い教育サービスの提供であるとされる。「生徒指導」「生活指導」のごとく、学業のみならず学生の生活全般に大学は介入し、指導するようになっている。

これは、少子化時代に生き残りをかける大学にとって、学生を確保するために不可欠な手段でもある。「学生消費者主義」¹⁹⁾の時代においては、学生の「るべき姿」よりも学生の実際の姿や希望に合わせて教育を行わざるを得ない。

これらのサービスがどれだけ学生のニーズに合っているか、どれだけ学生が満足しているかは別であるが、学生も大学が様々なサービスやケアを提供することを当然ととらえるばかりか、それらをより多く求める。そして、自ら道を探し切り開いていくのではなく、より依存的な姿勢を強める。消費者としてサービスの中身を左右する力を持つとはいっても、あくまで消費者は

生産者ではなく、提供されるものをただ受動的に受け取ったり受け取らなかったりするのみである²⁰⁾。

また90年代に入ると、大学改革がこの傾向に拍車をかけた。カリキュラム改革、授業改革、大学の自己評価、学生による授業評価など、それまでの大学教育のあり方への批判に基づいて様々な試みが実行に移されている。それが学生の大学生活や学習に対して充実や満足をもたらしているかについては、まだ肯定的な結果は見えていないし、今後も不透明なままである。しかし、大学は学生のニーズが何であれ、以前よりはそれに合わせようとするようになっていることは確かであり、このことは学生の大学に対するかまえをより受動的・依存的にさせ、彼らはさらに大学に多くのことを期待するようになると考えられる。かつての大学生は、大学は何も与えてくれないため自分で、大学外で解決しようとしたが、今の大学生は大学に求めるし、与えてくれないと不満を感じるのである。

(2) 90年代の社会・経済的状況

90年代になって客観的に変化した状況は、何と言ってもバブルの崩壊と不況である。これはもちろん、専ら経済活動に携わっているわけではない大学生に対して直接に影響するのではなく、いくつかの形で間接的に影響する。こうした要因として考えられるのは以下のことがらである。

①就職難（の認知）

不況による就職難が喧伝されることで、大学生は自らの将来をより不透明で希望のないものとして見ざるを得なくなる。また、仮に苦労して就職してもその先の見通しを暗くする否定的な情報ばかりが伝えられる（金融業界や官界での不正・不祥事をはじめとする、日本社会の多くの側面において露呈してきた行き詰まり。今後「有望」と見られるのは福祉関係ぐらいである）。この結果、肯定的に将来を見通すことは困難となる（「就職してもどうせ」「どこに就職しても大していいことはない」「別に無理に就職しなくとも」）。

多様な生き方やライフコースはかつて以上に提示・称揚され、個性や自己実現や夢の追求へと煽られる（彼らがカラオケで歌う近年のヒット曲には、「夢」を追いかけ、実現することへとウォームアップする内容の歌詞が極めて多い。そして学校教育までもが「個性尊重」を謳う）。にもかかわらず、それはどうすれば／どの程度実現可能なのかは見えないままである。好況のせいで大して努力しなくとも何者かにはなれると思えたバブル期の大学生に比べると、置かれている状況は対照的である。

一方、こうした状況下で少しでも将来を確実にするために、資格の取得など、目に見える形で自分の能力や努力、個性を表示するものへの志向性が強まり、これは「生徒化」につながる（ただしこの志向性を強めるのは不況や就職難のみではない）。

② 「消費」による自己実現、自己表現の崩壊

バブル崩壊以前は、消費において記号的に自己の位置を定め、またそこにアイデンティティを見出すことが（たとえ幻想であっても）可能であった。服装や持ち物のみならず、大学生が関与するあらゆるもの（大学、専攻分野、住居、出身高校、親の職業、友人、趣味、…）が「ブランド」となり得、そこに自らを定位することが可能だったのである。しかしこの記号的なゲームや競争が飽和もしくは崩壊し、消費的などのようなものに関与してもそれは自動的にアイデンティティや自己の居場所を与えてくれることはなくなり、それに関与することの意味も感じられなくなる。

もちろん経済的な意味でもそれらは遠いものとなったのであるが、バブル崩壊だけが原因ではなく、大学生自身がバブル的なものにリアリティを感じなくなったのである。彼らがリアリティを感じるのはこのように外から「乗せられた」「煽られた」ものではなく、気の合った友人と一緒にいて「なごむ」こと²¹⁾や、他人には理解されなくとも自分がこだわる趣味（「マイブーム」）などである。こうした志向性は、特にお金がかかるわけでもなく、誰に対しても開かれているという意味で、より「地に足のついた」ものであろうが、し

かしそれを自分で見つけなければならない=誰も与えてはくれないというところに彼らの困難がある。

こうして彼らはいわばキャンパスに「帰って」きた。そこでおとなしく日常生活を送る彼らは身近なところにささやかな喜びや充足を見出すと同時に、拭いがたい失望や諦観が彼らの日常を覆うのである。

6. 我々は大学生をどう見るか

以上にみてきたように、高等教育が大衆化するなかでキャンパスには「生徒化」した大学生が目立ち、彼ら自身と大学教員はともにそのことにもどかしさや物足りなさを感じている。こうした大学生が以前より増えてきているのかどうか、通時的なデータはない。しかしいずれにせよこれは、学ぶ者たちを良くも悪くもきめ細かく遇してきた学校教育の普及と成熟によるいわば「必然」である。しかも近年の大学内外の状況は、今後もひきつづき大学生の「生徒化」を促す可能性が高い。とすれば、この状況をいたずらに嘆いているよりも、この状況の持つ意味を考え、必然としての生徒化を受け入れながら、かつその状況に充たされていない学生と教員がそれを打開していくように高等教育を編み直していくという道しかあるまい。

矢野は「『青年』の死」と題した小論²²⁾で、近年大学教員の間に流布している「学生=子ども説」について、こう考えておけば学生に関わるあらゆるトラブルが説明できて何かと便利であるとしたうえで、しかしこの見方は説明できないことを説明できないままに放置してしまうと批判する。そして90年代の学生はむしろ、青年期を欠いて大人になっており、彼らの文化を「大人のビジネス・カルチャー」の素直な（部分的）反映と見る。彼らは「就職する一歩手前に行列している人たち」なのであり、逆に大人のビジネス・カルチャーに適応できずに大学教員になった自分達こそ大人ではないのだと結論する。

学生を、（まだ）子ども、（ちょうど今）青年、（もう）大人とそれぞれ見な

すとき、我々大学教員は、自分は発達段階や通過儀礼を経験して既に大人になっているということを暗黙裡に前提し、その立場から学生を裁断してしまう。しかし、我々が学生に期待してしまう「青年」、ないしはそれを経た「大人」というあり方じたいが歴史的・社会的産物であることは既に自明となっている²³⁾。そして、青年や大人のあり方は変容しており、我々自身もその変容の渦中を今日まで生きてきていることを忘れるべきでない（我々は大学教員たちの「子ども」ふりも日常的によく知っている）。

矢野は現代の学生を大人であると半ば逆説的に結論しているが、これはひとつレトリックであろう。近代的な意味での大人などもうどこにもいないのかもしれないし、一昔前の基準を適用して大人だ、大人でないと断じることに意味はないのである。それよりも、子ども－青年－大人という発達の道筋とそれぞれのあり方の変容、そしてその変容を促してきた、教育を含めた社会的・制度的・文化的要因を検討する²⁴⁾ための素材としてこそ大学生へのアプローチは意味を持つはずである。「生徒化」はそのためのひとつの感受概念である。そしてもちろん、矢野も言うように学生は大学のひとつの主体であるから、これを変数として組み入れた大学・高等教育研究がなされていかなければならぬ。

注

- 1) 同様の指摘は苅谷（1995）が、大学における「学校用語の氾濫」として既に行っている。「学校用語」とは他に「授業」「勉強」「宿題」「学校に行く」など。
- 2) 有本・金子・伊藤（1989）を参照。
- 3) 「若者論」は80年代以降も一貫して語られてきたし、そこには社会学的観点からの分析・考察も数多い。そこで言及されている「若者」の主要な部分は、それを主に語る研究者・大学教員の身近にいることや調査のしやすさゆえに大学生であると考えられるが、彼らが大学生であることや高等教育のあり方と関連させて論じたものは多くない。つまり、若者論は高等教育を視野に入れず、後述するように高等教育論は学生=若者を視野に入れていないのである。
- 4) 岩見（1996）によれば、「大学=レジャーランド論」は、「大学は大学でなくなった」と諦め「学者アイデンティティ」を無傷のまま残しながら「教員アイデンティティ」を持たない大学教員と、

「大学は人間形成の場」と割り切る学生との共謀・共犯によって作られた。そしてそれは結果として本当に大学をレジャーランドにしてしまったと批判する。なお、80年代に支配的だった大学生「ダメ論」については、新堀編（1985）を参照。

- 5) 多くの大学教員の慨嘆を背景に、大学生の私語現象は、高等教育研究におけるひとつのテーマとなっている観すらある。新堀（1992）など。
- 6) 改革論議において学生側の観点を取り入れるという課題は「学生による授業評価」に限定されている観がある。苅谷（1995, 1996b）を参照。
- 7) 紅林（1996）は、大学生対象の質問紙調査に基づいて、大学改革における大学側と学生側の認識のズレについて論じている。例えば、学生の多くは学生による授業評価を支持しているが、同時にそれが授業の改善には役立たないと考えている。彼らが授業評価に期待するのは、それが彼らの「ネットワーク化された履修行動」（出席することを前提に、履修前には授業についての情報を、試験前にはノートを交換する）をより確実なものにするためである。従って、大学側が意図するよう評価を参考に授業を改善することは、むしろ彼らの思惑に反することになる。同様の観点からの指摘として、苅谷（1996a）がある。
なお紅林のこの論考は、「生徒」ないし「生徒化」という言葉や概念をとりあげてはいないものの、現代の大学生の日常と大学改革に関して、本稿の関心に重なる部分が多い。
- 8) データは、筆者を含む「学生文化研究会」が1996年12月から97年1月にかけて実施した「現代大学生の生活と意識に関する調査」による。調査対象は首都圏及び東海圏にある7大学の学生864名である。共同研究者である酒井朗、児島明、田川隆博、坂口里佳、安藤めぐみの諸氏に記して感謝する。なお、この調査は南山大学1996年度パッヘル研究奨励金（代表者：酒井朗）の助成を受けている。
- 9) ここ数年大学生に「元気がない」ことは、マーケッターなどにより様々に指摘されている。例えば「わたし何をすればいいの？－漂流する大学生・当世気質」、『AERA』1997年6月30日号など。
- 10) 酒井・安藤（1998）は、学生へのインタビュー調査に基づいて、現在サークル活動は「レジャーランド」化した大学で自由気ままにキャンパスライフを謳歌するというイメージとは裏腹に、内部は小さな仲良しグループに分断されて人間関係は様々なインフォーマルなルールに縛られ、一方で活動じたいへのコミットメントは低下していることを見出している。
- 11) 大学生が「そもそも生徒でない」というのは、単に法律上の呼称の違いに過ぎないという見方もできよう（学校教育法で「学生」とされているのは大学院、短期大学を含む大学と高等専門学校に学ぶ者である）。しかし「学生」には、学校や教師に依存せずに自律的に学ぶ者という含意があり、高等教育機関に学ぶ者はこのような存在と位置づけられてきたと考えられる。因みに『広辞苑』（第五版）では「生徒」は「学校などで教育を受ける者」とされるのに対して、「学生」は「学業を

修める者」とある。

- 12) 佐々木 1991, p.168.
- 13) 同上, p.174.
- 14) ただし実際には-12点の者はおらず、最低は-10点。
- 15) 先にあげた関（1985）が言うように、教員とは模範的な生徒たることを身体化した者である。
- 16) 筆者らはかつて、小・中学生が「生活の場」である学校での「防衛」「生き残り」のために少人数で閉鎖的な友人関係を構築する傾向を「グループ化」として記述・分析したが（藤田・伊藤・坂口 1996），こうしたメカニズムは生徒化した大学生においても基本的に共通していると思われる。
- 17) トロウ訳書（1976）。
- 18) 荻谷（1997）。
- 19) リースマン訳書（1986=1981），喜多村（1996=1986）。
- 20) 喜多村（1996=1986），pp.39-40。
- 21) キャンパス内外の様々な場所に座り込んでお喋りをしたり行き交う人々を眺めて過ごす「ジベタリアン」と呼ばれるスタイルはこの典型であろう。
- 22) 矢野（1993）。
- 23) ギリス訳書（1985=1981）など。
- 24) こうした変容に関する筆者なりの試論として伊藤（1998）がある。

文 献

- 有本章・金子元久・伊藤彰浩 1989 「高等教育研究の動向」，『教育社会学研究』第45集
 藤田英典・伊藤茂樹・坂口里佳 1996 「小・中学生の友人関係とアイデンティティに関する研究－全国9都県での質問紙調査の結果より－」，『東京大学大学院教育学研究科紀要』36巻
 J.R.ギリス（北本正章訳） 1985（1981）『〈若者〉の社会史』，新曜社
 伊藤茂樹 1998 「移り変わる『青年期』」，辻井正次編『現代青年の理解の仕方』，ナカニシヤ出版
 岩見和彦 1986 「教育改革と子ども－学校の社会化機能の再検討－」，『教育社会学研究』第41集
 岩見和彦 1996 「関西大学－社会学部新入生調査から」，『IDE 現代の高等教育』1996年8月号
 岩見和彦・富田英典 1982 「現代中学生の意識分析－『生徒化』論の可能性－」，『関西大学社会学部紀要』14巻1号
 荻谷剛彦 1995 「変貌するキャンパス－『学問』なき大学の迷走」，荻谷剛彦編『キャンパスは変わる』，玉川大学出版会
 荻谷剛彦 1996a 「大学改革とオリエンテーション」，『IDE 現代の高等教育』1996年4月号

- 苅谷剛彦 1996b 「授業の質・学生の質」, 『IDE 現代の高等教育』1996年9月号
- 苅谷剛彦 1997 「大衆化時代の大学進学—〈価値多元社会〉における選抜と大学教育」, 『教育学研究』64卷3号
- 紅林伸幸 1996 「大学生における『大学改革』のリアリティー《学生自身による学生調査》から」, 『IDE 現代の高等教育』1996年8月号
- 喜多村和之 1996 (1986) 『新版 学生消費者の時代』, 玉川大学出版部
- D.リースマン (喜多村和之他訳) 1986 (1981) 『高等教育論—学生消費者主義時代の大学』, 玉川大学出版部
- 酒井朗・安藤めぐみ 1998 「課外活動にみる現代大学生の人間関係」, 『お茶の水女子大学 人間発達研究』第21号
- 佐々木賢 1983 『学校非行』, 三一書房
- 佐々木賢 1991 『怠学の研究』, 三一書房
- 関曠野 1985 「教育のニヒリズム」, 『現代思想』13卷2号
- 新堀通也編 1985 『大学生—ダメ論をこえて』(現代のエスプリ213)
- 新堀通也 1992 『私語研究序説』, 玉川大学出版部
- M.トロウ (天野郁夫他訳) 1976 『高学歴社会の大学』, 東京大学出版会
- 矢野眞和 1993 「『青年』の死」, 『IDE 現代の高等教育』1993年4月号